

京都は暑い

九月一五日、京都で日本史上初の暑さ六〇―六〇（猛暑日と熱帯夜）に到達しました。京都は暑いと言われていましたが、それを実証する結果になりました。彼岸を過ぎて少しは涼を感じるようになります。

清水 正の

一里一尺

～自然をたずねて～ 24

温暖化の中の初秋に思う

～暑さ寒さも彼岸まで～

り、出かけるのに自転車を使い、夜にクーラーを使わず窓を開けても寝る事ができるようにまりました。しかし今年は本当に異常な気候で局所的に度を超した降水量の雨が降り、竜巻突風で家が飛ばされるという事態が相次ぎました。野菜や果物の生育にも障害が出て形のおかしなもの、腐ってしまうものと生産者泣かせです。街路樹も若木は葉を枯らし瀕死の状態です。

サルスベリの花って面白い

とは言え、まだ夏の名残というわけではないですが、サルスベリが百日紅の名前の通り咲きつづけています。この花は江戸時代以前に渡来したとされています。今では庭や公園、街路樹に植栽されて多くの人が知る樹木と言えます。

もちろん樹肌がつるつるで木登り上手な猿さえも滑り落ちるといいう名前の由来も人の記憶に残りやすいのでしょうか。この木の多くは赤、白、ピンクですが、時々紫のものも目にします。遠くから見るとまるでライラック（リラ）に見えてしまいます。私は青少年時代を札幌近郊で過ごしたので、この花を見ると懐かしさを感じてしまいます。しかし、ライラックは初夏に咲く花です。これはおかしいぞとよく見るとサルスベリでした。こうした思いからか、紫色のサルスベリが気に入っています。九月の



サルスベリ

始め府立植物園で下に伸びた枝が目の前に来ていて、サルスベリの花を間近に見る事がありました。よく見ると実に変わった花の造りをしています。花の中心には沢山の雄しべがあり先が黄色くなっています。そのまわりに下向きに受精能力のある雄しべが六本と同じく下向きの雌しべが一本見られます。黄色の雄しべは虫を寄せるための看板のようなものです。そしてこれらの周囲に縮れてフリルのような塊が六つ円陣を作っています。実はこの縮れたものが六枚の花弁です。この手間暇かけた花も一日経てば散り初めます。サルスベリにはもう一つ変わった所があります。それは葉の付き方です。普通植物の葉は茎に一枚ずつ互い違いに付いたり(互生)、対になって付いたり(対生)するものが多

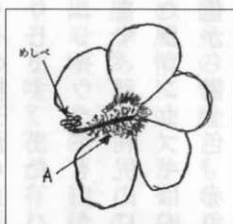
いのですが、この木は左右に二枚ずつの変則的な付き方をします。こうした葉の並びをする植物は少ないので種の同定には助かります。こうした葉の付き方(葉序)をコクサギ型葉序と呼んでいます。

どっちがどっち？

ムクゲとフヨウ

同時期に咲き続けているものにムクゲとフヨウがあります。大きな花で庭などに植栽されよく目立ちます。どちらもアオイ科フヨウ属で花はよく似ています。ムクゲは無窮花と書き次から次へと花を咲かし果てがないことによるものです。この花は隣国韓国の国花とされ、永遠に栄える国として慕われています。フヨウに比べて葉も花も小さめです。そして花弁はフヨウが碗状なのに対して平開をし

ています。どちらも雌しべが突き出ているのですがムクゲは真っ直ぐ、フヨウは先端部が上向きに曲がっています。以前この曲がりかたに



フヨウの花 Aは雄蕊
雌しべ 上向きに湾曲



フヨウ



ムクゲ

なつてたくさんさんのフヨウ属の花を
探しては確認したりしていたので
すが、ハイビスカスもケナフも曲
がつてはいませんでした。近縁種
のオクラも曲がつてはいませんで
した。どうしてフヨウだけが上に
曲がつているのでしょうか。一定
の推論は立てられても、確定する
には訪花昆虫など詳細な観察がい
ります。

花にも酔っぱらいがいた？!

花の色は移りにけりな

よく知られているとは思いますが、面白いフヨウの品種を紹介し
ておきましょう。「酔芙蓉」です。
名付け方が絶妙ですね。この花、
咲くときは白花でしたが、お昼頃
から徐々に酒を飲んだときのよう
にはんりの赤味を帯び、夕方には
かなり赤くなつてしまします。別

段水やりの代わりにお酒をやつて
いるわけではありません。不思議
な花です。この不思議を調べてみ
ましょう。しかしネットではいろ
いろな話が出てきます。赤色を作
り出すアントシアンは二五℃以上
で生成されるので昼頃から赤くな
ります。あるいは白色は虫からよ
く見えるが赤は黒く見えるので、
虫が受粉した後の花は赤い色を付
けて虫を寄せ付けない。そして赤
くなつた花は未受精なので花柄の
途中で切り落としてしまうなどと
の説明があります。はてあなたは
どう思いますか。



ニシキウツギ

実際植物には花の色が変わるも
のは他にもあります。たとえばス
イカズラ。時とともに白から黄色
に変わり、その様子から金銀花と
呼ばれたりします。また、ハコネ
ウツギやニシキウツギも白から赤
へ変化します。私が利尻山に登つ
たとき見たウコンウツギは内側の
色が黄緑色から鬱金色、赤色と変
わります。登りながら同じような
木に違う色の花を見るものですか
ら三種の花が有るのかと思ひ、
すつかり騙されました。

ヒガンバナの律儀さは

どこから来るの？

彼岸を過ぎるとさすがに夜風は
冷たくなり、時に窓を閉めたくな
ります。猛暑から突然の変化に驚
き、昨今の気候変動なればこのま
ま一気に冬になるのではないかと

不安にかられます。

自然とは寛容なのか、これほどまでの暑さが続いていたのに、ヒガンバナの花は名前の通りに彼岸に咲き出しました。この花は暑さとは関わりなしに生活史を刻むのかもしれない、花の時期に葉がありません。葉がなければ日の出や日の入りを感知することができないので日の長さで生活を決めているのではないと考えられます。やはり温度（涼しさ）を感知する別のセンサーを持っているのでしょうか。ヒガンバナは田んぼの畦や川の土手などでよくみかけます。田



近鉄鉄橋とヒガンバナ

んぼの場合、稔る稲穂の黄色と相まって朱の色が鮮やかです。しかし昨今の稲は早生の品種が増え、ヒガンバナが咲く時期には稲穂が刈り取られています。湖北の琵琶湖畔に咲くヒガンバナは、湖の青を背景にコントラストが強く鮮烈。里の秋の風情とは一風違った趣を感じさせてくれます。一度皆さんも訪れてみてください。

持ちつ持たれつ、

いえいえ持たれつ持たれつです

ススキとナンバンギセル

日本の秋の花と言えば秋の七草に代表されますが、その中で花だろうかと思うものが一つあります。ススキです。ススキはイネ科で、私達が知る所の桜やバラ、椿と言ったように花卉がはつきりしたものではありません。そしてどの

時期が蕾なのか花なのか実なのか、余程の興味ある人しかわからないし、見ようと



ススキ

もしいていません。それなのに秋の七草にもなり、お月見には月見団子とあわせて備えられる。またススキ原は観光の名所ともなります。日本の秋の風情には欠かせないほどの存在感があります。このススキの穂が出る頃、その下に隠れるようにひっそり咲く花が有ります。地上部にいきなり花柄を出してその先にほぼ直角に曲がつて薄紅紫色の花が咲きます。まるで煙管（きせる）のような形なのでナンバン

ギセルと言われています。茎は地面の中にあると言われていますが、私は掘ったこともないのでわかりません。緑がないことから光合成はしていないようで、ススキやオギなどのイネ科、ミヨウガなどを寄主として寄生しています。向島の宇治川河原にも多く見られます。この花は古くから知られていて万葉集（巻十）に「道の辺の尾花が下の思ひ草今さらさらに何か思はむ」と詠まれています。この句の「思ひ草」がナンバンギセルの古語です。因みに尾花とはススキをさしています。



ナンバンギセル

行ってみてわかる

気候の垂直変化のすごさ ～日本の自然の奥深さ～

九月一七日から二泊三日で立山に行きました。残念ながら大雨で雄山や大汝山に登ることは出来ませんでした。若干の雨の止み間に室堂からみくりが池のあたりを周遊しました。そこではナナカマドやダケカンバが色付き、チングルマが地面を赤く、

イワイチヨウが黄色の絨毯となり地面を染めていました。シラタマノキの実が白く敷き詰めたように地面を覆っていました。すっかり秋の終わりでオヤマリンドウも終わって、僅か

にアカバナワレモコウ、ウメバチソウが一輪二輪と咲いていました。京都近郊ではリンドウもウメバチソウも十一月の花ですね。拙稿が皆さんの手に届く頃の気候が立山では九月です。標高二千数百の差が二ヶ月半の季節の違いとなって表れています。垂直（標高）での変化は水平（距離）の変化をはるかに凌ぎます。「一里一尺」の騒ぎではない自然を持つのが日本です。



チングルマ 種子と紅葉



イワイチヨウの黄葉



シラタマノキの実



ウメバチソウ